愛知教育大学附属高等学校研究紀要第 49 号
pp.5～16（March, 2022）

探究活動の充実と継続を目指した取り組み

―議論と実践の報告―

第１学年　小田原健一　青山昌平

本校では令和元（2019）年度より、学校全体で探究活動を推進していくために議論を重ねてきた。その出発点は、生徒数の定員が 200 名から 120 名へと大幅に減少することが決まったなかで、学校の新たな魅力を打ち出す必要があったことにある。本報告は、今年度も含めた３年間の議論の過程と、実際に生徒数が減った今年度第１学年の実践をまとめたものである。

＜キーワード＞　探究活動　附高ゼミ　これからの附属高校を考える会（KFK）　SDGs

1. はじめに

元号が平成から令和へと変わった 2019 年、定員数 200 名から 120 名への大幅削減という学校の大きな変更点が職員に通達された。当時の北河校長からこの知らせを初めて伝えられた場について、記憶は薄らいでいるが、記録を確認すると６月中旬の運営委員会および職員会議となっている。筆者（小田原）の脳裏に大きな不安がよぎった記憶は今でもはっきりと残っており、恐らく多くの職員も不安だったと思われる。しかし決定事項に不安を感じているだけでは組織として前に進んでいくことはできないので、クラス減後の学校のあり方、魅力の打ち出し方を検討するため、クラス減対応プロジェクトチームが編成された。構成員は発案者の校長以下、教頭、教務主任、生徒指導主事、校務主任（当時は小田原）、進路指導主事の６名であった。

また新型コロナウイルス感染拡大に伴い、約３ヶ月間の休校を余儀なくされたのが令和２年３月から５月にかけてであるが、本校では４月中旬から５月下旬にかけては職員も原則として在宅勤務となり、毎朝の職員朝礼のほか、必要に応じた学年・教科・分掌などの打ち合わせを、Zoom を活用して実施するようになった。この在宅勤務期間中に当時の谷上教頭から「これからの附属高校を考える会」（以下、校内で使用している略称「KFK」の表記とする）の発足についての提案ならびに、今後の学校が目指すべき姿についてのアンケート調査が実施された。そして休校期間が明け、学校での教育活動が再開されていくなかで、教頭、教務主任（国語科）、英語科主任、数学科主任、理科主任、社会科主任と原則として教科の代表者が集まる形式で KFK が発足した。

今年度は定員 120 名の学年が入学しており、該当学年の第１学年だけでなく、第２・３学年とも連携を図りながら探究活動の充実と継続を目指した実践を展開している。また４月より、校長、教頭、教務主任、研究主任、第１学年主任（小田原）、第１学年総合的な探究の時間担当（青山）を構成員とする新 KFK を発足させ、総合的な探究の時間のあり方について検討し、７月からはより開かれた会とするため、各学年の総合的な探究の時間担当および有志職員が参加する形式を採っている。

なお本報告の執筆については、１．はじめに、２．（１）（２）過年度の議論の過程、３．今年度の実践１（『一生使える探究のコツ』の使用）を主として小田原が担当し、２．（３）今年度の議論の過程、４．今年度の実践２（SDGs 総選挙学校編）を主として青山が担当し、５．おわりにを共同で担当している。

2. 議論の報告

ここでは、約３年間に渡る探究活動の充実と継続を目指した議論の過程をまとめる。

(1) 令和元年度の議論の過程

少子化に伴い全国的に公立高校での統廃合や定員削減が進んでいく中で、本校でも定員数の削減について、運営委員会や職員会議の議題になることこそなかったもの、職員間では数年前から話題にのぼっていた。定員減がいつかは来ると想定していた職員も少なくなかったはずだが、200 名から 120 名への大幅減については、想定外だったのではないだろうか。少なくとも私個人は、この定員減に危機感を覚えた。

この定員削減は、学校全体の危機なのかどうかは別として大きな転換点であることに相違はない。この転換に対応すべく当時の北河校長の提案で発足したのが先述のクラス減対応プロジェクトチーム（校長、教頭、教務主任、生徒指導主事、校務主任、進路指導主事の６名で構成）である。

このプロジェクトチームが最初に集まった日については、手元の資料に日付けの記録が残っていないのだが、記憶では令和元年の１０月頃のはずである。資料から確認できることは、１１月２０日（水）に全校生徒と保護者をはじめ学校の内外に、令和３年度からの入学定員数の減少について周知する方針を固めたこと、今後の検討課題として学校行事の精選、分掌業務の検証、部活動の見直し（生徒指導部）、クラス編成（教務部）などをあげたことである。

２回目の会議は周知を終えた翌日の１１月２１日（木）に行われたことが記録に残っている。この日の会議資料は手元にはないが、当時私が所属していた校務部会の記録を確認すると、ＰＴＡ活動の規模縮小や委員会の統廃合を検討しており、各分掌業務の検証について時間を割いたと思われる。

３回目の会議は年が明けた１月３０日（木）に実施され、ここで学校全体の今後について議論を深めた。この会議では本校が求める生徒像として現行の（１）本校を志望する理由が明確であること、（２）将来の進路目標が明確であり、学力向上に努めること、（３）本校の校則を遵守し、規則正しく生活できることを定員減後も継続していく方針が示された。また、学力について学校教育法が定める三要素（「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」）の中で、本校として重点化・特色化をしていくことの是非について意見が交わされた。この時の資料を確認すると、本校はどちらかと言うと「知識・技能」の獲得を重視した教育活動を行ってきたが、「思考力・判断力・表現力等」の育成に重点化していく方針が、この段階で少しずつ見え始めている。

４回目の会議は２月１９日（水）に実施された。この会議では現在（令和４年１月上旬）も実施に向けた検討が続いている「附高ゼミ」の提案が初めて出されている。提案された資料には『学年をまたいだ「附高ゼミ」を実践し、１年は文理探究、２年から探究担当のもと探究活動。総合的な探究の時間のみならず、コンテストへの参加、レポート課題、公開講座の紹介・引率、３年では推薦ＡＯか一般選抜かの見極めの後、指導、推薦文などの作成の担当』とある。この会議で、今後のロードマップを進路指導部と教務部を中心に作成し、令和２年度中に具体案を提示するという計画が立案された。

５回目の会議は３月１２日（木）に実施され、これがプロジェクトチームとして最後の会議になった。今振り返ると、この時点で既に新型コロナウイルス感染症拡大のため休校期間に入っており、この１ヶ月後には職員も原則在宅勤務となるなど、探究活動の充実に向けた議論を進めるには難しい状況となっていた。この会議では校長から「知識・技能の習得に加え、探究的な活動を重視する」という文言が目標として提示された。また、探究的な活動を推進する場として総合的な探究の時間を活用すること、教

務部を中心に立案し、全分掌及び全職員が関わる学校全体の（学年ごとではなく）取り組みとしていくこと、これらのことを令和２年度の１年間をかけて議論し、まとめていくことが確認された。各分掌から探究活動へのアイデアが提案されるなかで、私は校務部の立場から海外研修の再開（感染症収束の見通しが立たない現段階では困難な状況となっている）、地域社会に開かれた学校作りの推進を提案した。特に後者については定員 120 名という小規模校が学校としての魅力や活力を維持していくためには、地域との連携が欠かせないと思い、こだわりを持っていた。

年度末の運営委員会および職員会議でこれまでのプロジェクトチームの検討事項を報告した。資料の一部抜粋は以下の文である。

『この度のクラス減にあたり、これまでの個々の取り組みを基盤としつつ、本校の教育活動を再構築し、総合的な探究の時間を中心に据え、各教科の教材と対照させながら指導計画を立て、「主体的・対話的で深い学び」を実践し、本校学校教育の核とする。』

大きな方針として、探究活動を充実させるために総合的な探究の時間を活用すること、学年や担当者ごとの取り組みではなく、学校全体の継続的な取り組みとすることが示された。

(2) 令和２年度の議論の過程

年度当初から職員が原則在宅勤務となる異例の年度であったが、定員数削減前の本校にとって大切な年度でもあった。探究活動の充実化について検討する場として、在宅勤務期間中に KFK の構想が当時の谷上教頭より発表された。休校期間が明けると教頭、教務主任（国語科）、英語科主任、数学科主任、理科主任、社会科主任から成る KFK が発足した。この会議に私は参加してなかったので、ここでは教務主任や教科主任に確認した事項や職員全体に周知された事項を報告する。

各回の会議はレジメに沿うような形式ではなく、参加者が各々のアイデアを出し合うような形式で行われており、書き残されたメモなどを参照させてもらった。７月１７日（金）の会議では、活動内容として SDGs、金融教育、主権者教育、統計・データ分析、国際交流、英語発表などが提案され、活動方法として企業や大学との連携のあり方が検討されている。また、愛知教育大学の附属学校として、大学との連携を深めるに留まらず、教育者を育てる活動についても検討されている。

１０月１６日（金）の会議では、教科の取り組みとの連携、修学旅行を中心とした学校行事との連携、ゼミ活動と SDGs と関連性などについて検討されている。

この秋には KFK のメンバーの多くがお茶の水大学附属高等学校を視察に訪れているが、この報告が１２月１７日（木）の職員会議で通知されいている。お茶の水での実践事例を参考に大学教員による講義実施、研究テーマを領域に分けること（本校は８つを予定）、外部コンテストへの積極的な応募、研究テーマについて教えすぎない方針などが「附高ゼミ」の目指す形として示された。

この後、KFK の会議が開かれた日程は確認できないのだが、２月１５日（月）の運営委員会で再度、KFK からの報告があった。ここでは本校が目指す生徒像として（１）社会のために役立てる、リーダーとして活躍できる「あたたかい」生徒、（２）自ら学び、自ら考える力を持った「たくましい」生徒、（３）寛容な心、多様性を理解できる「おおらかな」生徒が提案され（「　」の部分は本校が掲げる教育目標）、そのために各学年で育成する力、各学年のプログラム例が示された。その一方で、定員 120 名となる学年の入学を目前に控え、もっと具体的に詰める段階ではないのかとの声があがり、３月１６日（火）に拡大 KFK として、従来メンバーに加え有志職員が参加する会議が開催された。この会議には私も参加し、地域との連携や SDGs を重視することなどを述べた記憶がある。この後、令和３年度の第１学年を担当し、探究活動の充実と継続を目指した実践をしていくこととなった。

(3) 今年度の議論の過程

今年度は前年度までの KFK 会議に代わって新 KFK が発足し、毎月最低１回の会議を実施してきた。第 6 回目までは、校長、教頭、教務主任、研究主任、第 1 学年主任（小田原）、第 1 学年総合的な探究の時間担当（青山）の６名での会議が行われ、第 7 回目からは参加者が第 2 学年と第 3 学年の代表教員と有志の教員に拡大した。この中で議論されてきた内容や様子は以下の通りである。

1）49 回生の総合的な探究の時間の計画と目標の設定

４月の会議で 49 回生の令和３年度１年次の年間計画と３カ年の計画の検討が実施された。令和３年度の総合的な探究の時間の柱となる活動は『一生使える探究のコツ』（トモノカイ）のテキストによる探究活動の基礎を学ぶことと、「SDGs 総選挙～学校編～」の実施である。また、２年次以降では、「附高ゼミ」が１つの柱となることが決まり、探究活動を中心とした計画の作成が進んだ。そして、最も重点を置いて議論された内容が、３年間を通して目指すべき生徒像と育みたい力の検討であった。本校の教育目標を参考に、育てたい生徒像を「自分を大切にし、周囲に関心を持ち、持続可能な地域や国際社会作りに貢献する意欲を持った生徒」とし、育くみたい力として「課題発見能力」、「協調性」、「表現力」の３つを設定した。そして、これらをもとに３年間を通したルーブリックを作成して、総合的な探究の時間の柱を設定した。

2）愛教大 SEH（Super Education High School）プロジェクトの発足

本校の学びを明確にし、魅力を作り出すために愛教大 SEH（Super Education High School）プロジェクトが校長から提唱された。このプロジェクトは「探究力の育成」をメインテーマとして本校の教育活動を展開することが決まり、「人生を切り拓く探究力」として「主体的に学び続ける力」、「他を受け入れ協働する力」、「新たな価値観を創造する力」の３つの力を育むことを目標とすることになった。そして、最終的に目指す生徒像として、「地域と協働し、子どもを成長させられる小中高特などの教諭」と「多様性を理解し、周囲と協働して地域社会で活躍できる人材」の２つが設定された。こうして、プロジェクトの概要が決まり、このプロジェクトを達成するために、総合的な探究の時間のより一層の充実を目指して議論が行われていった。

3)「附高ゼミ」について

令和元年度の議論の中で登場した「附高ゼミ」を総合的な探究の時間の柱とするための議論が行われた。令和２年度までの議論では、「少人数のゼミ形式による探究活動」と「２、３年生合同実施」が「附高ゼミ」の基本路線として決まっていた。今年度の議論では、この「附高ゼミ」を３カ年計画の中に盛り込むことと、より具体的な形にすることが直近の課題であった。３カ年計画の位置づけとしては、２年次の後期から３年次まで継続して実施することが決定し、２年次のゼミが始まるところで３年生と合同で行う時間を確保して、学年間の連携を実施することとした。そして、一番難航している議論は、８つのゼミをどのように設定するかである。本校は高大連携スクールという愛知教育大学と連携した教育活動が行われている。この高大連携スクールで開講されている講座を元に８つのゼミを設定し、そこから検討していった。その結果、「こどもと発達」、「言語・国際」、「生命・環境」、「ジェンダー・人権・福祉」、「建築・機械・工学」、「数理情報」、「法・経済・政治」、「文化・芸術」の８つのゼミが設定された。しかし、愛知教育大学との連携を検討していく中で、この８つのゼミでは実施が難しい可能性が浮上したため、８つのゼミの再編が行われている。

4）探究活動を充実させるための高大連携について

ここまで総合的な探究の時間について議論してきたが、最も根本的な目的は、「本校の教育活動の核

として探究活動を充実させ、魅力ある附属高校にすること」である。そのための１つに「附高ゼミ」があるわけだが、この「附高ゼミ」の議論の中で「高大の連携を強めることで探究活動を充実させることができないのか？」という議論が新たに登場した。そのため、「附高ゼミ」を中心に、本校の探究活動に大学の協力を得る方法や内容の検討が行われている。

5）カリキュラム・マネジメントについて

総合的な探究の時間に実施する活動が中心の議題であったが、そこからカリキュラム・マネジメントの議論が浮上した。本校は週１時間で総合的な探究の時間を実施しているが、その時間だけでは探究活動で必要な知識や技能を全て網羅することは不可能である。そのため、各教科で探究活動と連携できる知識や技能などの学びを洗い出してカリキュラム・マネジメントを構築し、探究活動と各教科の連携を強化することを目指すことが共有された。

11 月１日には現職研修として全教員で愛知淑徳大学准教授加藤智先生の講演を受講した。事例紹介としてカリキュラム・デザインを実施している高校の実践を学び、カリキュラム・マネジメントのイメージ図の１つを得ることができた。本校のカリキュラム・デザインの議論が進行中である。

３．今年度の実践１（『一生使える探究のコツ』の使用）

(1) 実践に向けた準備

令和３年の４月、120 名の少人数編成となった学年が入学し、いよいよ実践の段階に入った。なお、クラス編成については、定員減が発表された時点では４０人編成の３クラスが想定されていたが、令和２年度中の大学側との交渉により３０人編成の４クラスが認められ、探究活動を進めやすい少人数クラスでスタートすることが可能となった。過去２年間の議論を参照に４月２日の学年会、上旬の新 KFK 会議で提案した資料の抜粋が以下の図１である。

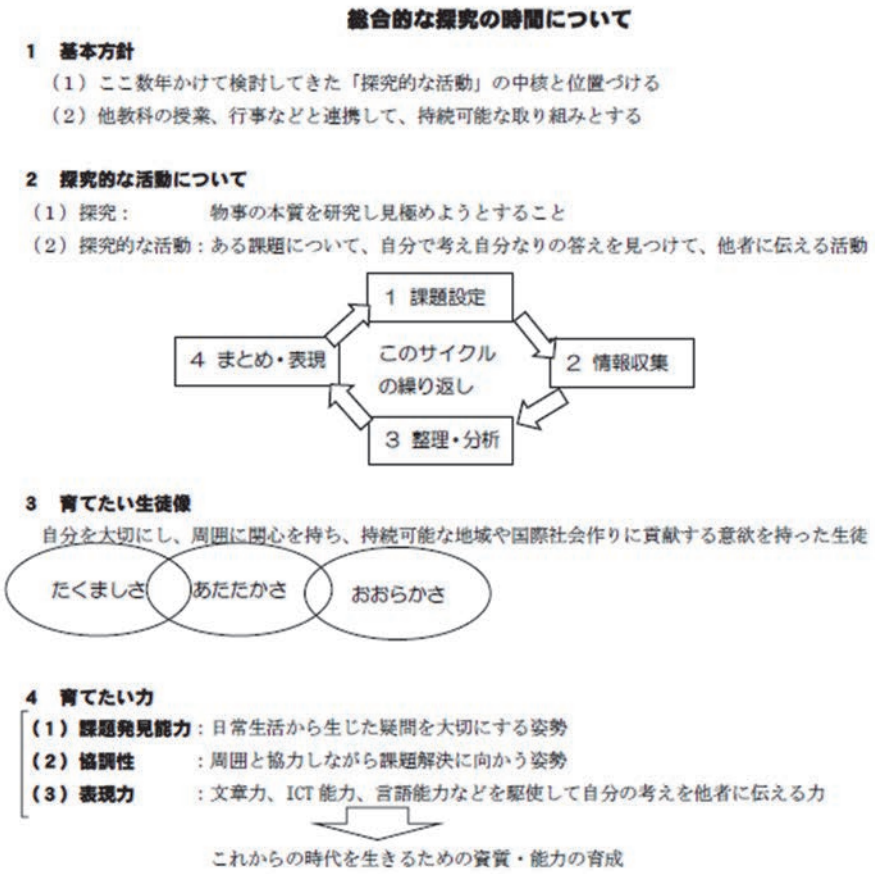

図1 会議資料より抜粋

この他に２年後半からの「附高ゼミ」を含めた３年間の活動予定を示し、この後、青山教諭がこれを元にルーブリックを作成している。なお、３年間の活動予定については今年度分も含めて微調整を加えながら動いている。

（２）探究活動の開始

本校は総合的な探究の時間を軸に探究活動を充実させ、継続させることを目指してきた。そのスタートの年度となり、まずは各クラスの担任・副担任の目線合わせをし、学年が一つになって動く必要があった。そこで、統一したテキストの使用を検討し、最終的には教員用の手引き書、授業用のスライドが充実していた『一生使える探究のコツ　実践の手引き～導入編～』(神原洋子著　(株) トモノカイ発行) を使用することとした。テキストは５０分授業１０～１６回程度で構成され、当初スライドは最初の３回分とされていたが、最終的には全回のスライドが提供されて大いに活用することができた。また、生徒の現状に合わせて実施してくため、独自で毎回の授業の進行予定表を提示した。次の図２は第１学年の年間計画表、図３は第４回目の授業進行予定、図４・５は活動中の生徒の様子である。

図２　ＬＴ・総合の年間予定

LT計画			
回数	月日	曜日	項目
	4月8日	木	HR役員選出
	4月12日	月	全校集会1・前期会長選挙
	4月19日	月	全校集会2・役員承認
	4月26日	月	大学散策
	5月3日	月	憲法記念日
	5月10日	月	クラスマッチチーム決め・身だしなみ2
	5月17日	月	結団式
	5月25日	火	考査最終日(学習マップ動画、夢ナビライブ)
	5月31日	月	類型選択について
	6月7日	月	碧海野祭役割分担決め＊年計画から変更
	6月14日	月	全校集会3・身だしなみ3＊年間から変更
	6月21日	月	
	6月28日	月	期末考査
	7月5日	月	体育祭選手決め
	7月12日	月	1・2組ストレス対策講座/3・4組コツ5
	7月19日	月	短縮期間　LTなし
	7月21日	水	終業式
夏季休暇			
	9月1日	水	始業式
	9月6日	月	役員打ち合わせ
	9月13日	月	体育祭予行
	9月20日	月	敬老の日
12.13	9月27日	月	大学出前講義(総合)6・7限連続
	10月4日	月	HR役員選出
	10月11日	月	全校集会4　会長選挙
	10月18日	月	家庭学習日
17	10月25日	月	一生使える探究のコツ9
19	11月1日	月	一生使える探究のコツ11
	11月8日	月	模試振り返り+ドッジボール練習
	11月15日	月	クラス対抗ドッジボール
23	11月22日	月	SDGs総選挙1(オリエンテーション)
	11月29日	月	期末考査
25	12月6日	月	SDGs総選挙3(政策立案)
	12月13日	月	全校集会6　身だしなみ7
	12月20日	月	短縮期間　LTなし
	12月22日	水	終業式
冬季休暇			
	1月6日	木	始業式
	1月10日	月	成人の日
29	1月17日	月	SDGs総選挙7(クラス演説・投票1)
	1月24日	月	準備
	1月31日	月	学年LT(百人一首)
	2月7日	月	家庭学習日
	2月14日	月	LT復活　進路LT(共通テストについて)＋学年末に向けて
	2月21日	月	学年末考査
	3月7日	月	学年LT(発表準備)
	3月14日	月	写真撮影・教科書販売？　OR　振り返り
	3月18日	金	終業式

総合計画			
回数	月日	曜日	項目
1	4月15日	木	オリエンテーション1
2	4月22日	木	オリエンテーション2
	4月29日	木	昭和の日
3	5月6日	木	一生使える探究のコツ1
4	5月13日	木	一生使える探究のコツ2
	5月20日	木	中間考査
5	5月27日	木	一生使える探究のコツ3
6	6月3日	木	研究室訪問(高大連携ゼミ)1参加
7	6月10日	木	研究室訪問(高大連携ゼミ)2報告会
8	6月17日	木	一生使える探究のコツ4
9	6月24日	木	服の力プロジェクト講演
	7月1日	木	期末考査
10	7月8日	木	服の力プロジェクト・探究活動と絡めて
11	7月15日	木	1・2コツ5/3・4組ストレス講座
夏季休暇			
	9月2日	木	進路LT(類型、理社選択のガイダンス)
	9月9日	木	進路LT(類型について考える)
	9月16日	木	碧海野祭
	9月23日	木	秋分の日
14	9月30日	木	一生使える探究のコツ6
15	10月14日	木	一生使える探究のコツ7
16	10月21日	木	一生使える探究のコツ8
18	10月28日	木	一生使える探究のコツ10
20・21	11月4日	木	一生使える探究のコツ12・13　2時間連続
	11月11日	木	11月4日の6限授業
22	11月18日	木	一生使える探究のコツ14(15含む)
24	11月25日	木	SDGs総選挙2(政策立案)
	12月2日	木	期末考査
26	12月9日	木	SDGs総選挙4(政策立案)
27	12月16日	木	SDGs総選挙5(政策立案)
冬季休暇			
28	1月13日	木	SDGs総選挙6(政策立案)
30	1月20日	木	SDGs総選挙8(クラス演説・投票2)
31	1月27日	木	SDGs総選挙9(代表政党視聴)
32.33	2月3日	木	SDGs総選挙10・11(2時間連続で学年演説・投票)＊体育館
	2月10日	木	短縮　総合なし
	2月17日	木	2月3日6限の授業
	2月24日	木	学年末考査
	3月3日	木	学年LT(発表準備)
	3月10日	木	学年LT(クラス発表)
	3月17日	木	写真撮影・教科書販売？　OR　振り返り

6月17日（木）7限の総合的な探究の時間について

1 内容　「一生使える探究のコツ　Let's　Try④課題を設定しよう」

2 場所　各教室

3 担当　正副担任

4 準備
・スライドDL　【正（副）担任】
・授業準備【正副担任】　指導解説書 P53・54が本時の概要
P55～60が詳細案　＊生徒が探究テーマを選ぶパターンで

5 進行予定

・全体の流れ、課題設定の流れ（5分）	スライド81～94
・探究テーマについて切り口をもつ（8分）	スライド～96　work2（P13）
・疑問をたくさん出し、問を一つに絞る（10分）	スライド～100　work3・4（P13）
・絞った問を見合う（10分）	スライド～101　ペアX2・3パターン
・問を作り直す、言葉の定義を明確にする（9分）	スライド～106　work5・6（P15）
・自分の問を発表する（5分）	3人グループで一人1分半
・まとめと次回確認（3分）	次回（考査後）が1学期最後、 情報収集に入る

6 補足
・写真撮影【加古】適宜巡回
・1・4組動画撮影【船井・戸田】　＊生徒のグループ活動の様子を10～15分程度で
・データは【授業実践データ】→【授業実践動画】→【2021】→【49回生】→【6.17総合】へ

図3　第4回目の授業進行予定。指導解説書を基に毎回、生徒の実状に合わせて作成した。

図4　マスクと換気などで感染防止を図りながら、対話的な活動を進めた。

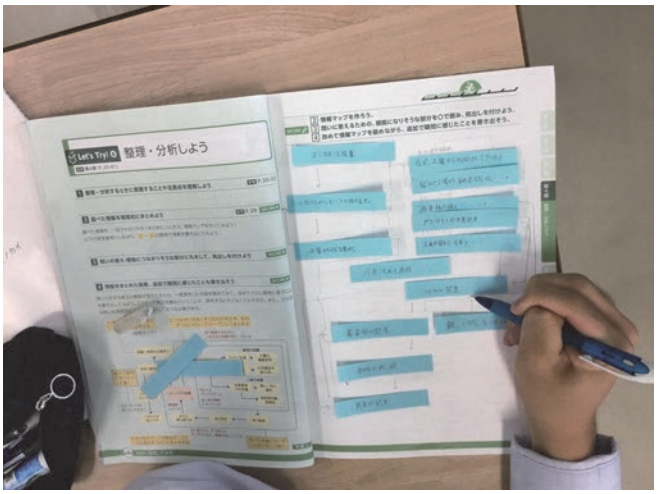

図5　情報を整理するためにフセンを活用した。

（３）成果発表

テキストを使用した１１回目の授業で発表資料の仕上げ及びリハーサルを行い、１２・１３回目の授業を２時間連続として発表をさせた。次の図６が発表の要点をまとめた案内資料、図７・８が生徒の発表の様子である。

令和３年度　第１学年　総合的な探究の時間

『一生使える探究のコツ』発表に向けて

【予定】

月日	ワークブック	備考
１０月２５日（月）	Let's Try7　まとめ・表現しよう２	資料を作る（ポスター作成）
１０月２８日（木）	Let's Try7　まとめ・表現しよう３	資料を作る（ポスター完成）
１１月　１日（月）	Let's Try8　まとめ・表現しよう１	発表する（リハーサル）
１１月　４日（木）	Let's Try8　まとめ・表現しよう２	発表する（本番）
１１月　４日（木）	Let's Try8　まとめ・表現しよう３	発表する（本番）２時間連続
１１月１８日（木）	Let's Try9　論証のコツを学ぼう	
１１月２２日（月）	Let's Try１０アイデア提案のコツを学ぼう	

【資料作りについて】

○A４用紙を使用　＊１０月２５日（月）７限で配付

・８枚貼り合わせてポスターにする。（貼り合わせの見本は３階中央廊下の掲示版にあります）

・１枚ずつ使用してスライド（紙芝居）形式にする。この場合は８枚を超えてもよい。

・６枚ポスター＋２枚スライドなどの組み合わせもよい。

・いずれの方法でも８枚未満はダメです。

○マジックを使用

・学校の備品を貸し出します。各自のもの（マジック、クレヨンなど）を持参してもよい。

○その他

・ポスター貼り合わせ用のテープなどは各自で用意してください。

・写真や図表を資料に盛り込みたい場合は各自で印刷したものを持参してください。

【発表について】

○時間

・発表５分＋質疑応答３分

○リハーサル

・クラス毎に１～４組の各教室で行います。担任の先生の指示をきいてください。

○本番

・学年全体を１２カ所に分けて行います。使用教室は１～４組、ゼミA、ETの６教室で各教室を前後で２つに分けて合計１２カ所になります。

・１０人ずつのグループができるので、順番に９人の生徒の前で発表をします。発表場所、グループ、タイムスケジュール、担当教員などの詳細は後日連絡します。

【その他】

・全員の発表内容をまとめた簡単なパンフレットを作成しますので、１０月２８日（木）７限終了時までにクラッシーのアンケートに答えてください。

図6　発表に向けた生徒への最終案内。発表時間5分などの情報は夏休み前に伝えた。

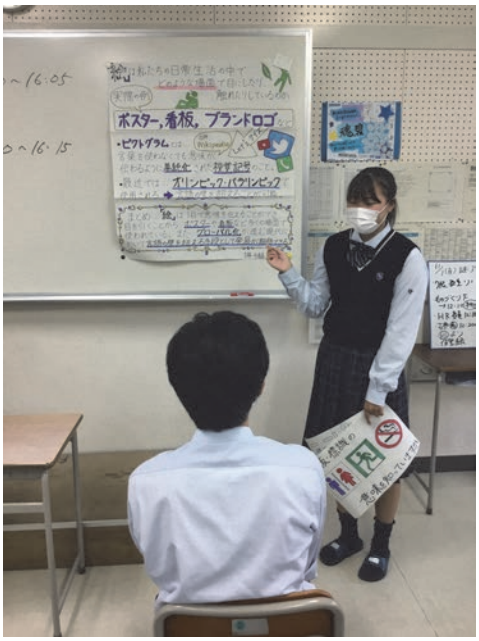

図7　リハーサルの様子
この生徒はポスターを作製して発表に望んだ。

図8　発表本番の様子
多くの生徒はこのようにスライド風に A4 用紙を使用して発表した。

発表資料については、パワーポイントの活用なども検討したが、今年度の１年生はまだ一人一台の端末を所有してない。学校の生徒用パソコンと iPad を合わせても約９０台と全員分はないため、紙媒体での発表とした。本校では令和４年度の新入生から一人一台のパソコン（自費購入）を所有することになるので、今後は発表方法について選択肢が広がると思われる。

（4）アンケート結果

発表終了後に活動を振り返るための生徒アンケートを行ったが、授業時間中にアンケートへの回答時間を取ることをしなかったため、回答数は４５と少なくなってしまった。今後の授業アンケートはやはり、授業時間内に十分時間を確保して実施すべであろうが、アンケート結果の抜粋を次の表１に示す。

表1　生徒アンケート結果より抜粋

自分の満足度	1 とても低い	2 低い	3 普通	4 高い	5 とても高い
人数	0	0	12	28	5

活動の満足度	1 とても低い	2 低い	3 普通	4 高い	5 とても高い
人数	0	0	15	18	12

自分の活動への満足度と学校として探究活動に取り組むことへの満足度を、分けて質問してみた。こちらが側の意図が正確に伝わったかどうかは不明だが、アンケート結果の数値と以下のような生徒の記述意見から、総じて探究活動に取り組むことへの満足度は高く、今回の活動での反省点を次に活かそうと考えている生徒は少なくないと思われる。

「自己肯定感のある子どもとあまりない子どもの性格や思考の違いについても探究したい。

本とネット以外もうまく活用して探究活動をしていきたい。」

「今回は野菜の色にはどんな理由が隠されているのかというテーマで探究していって、調べているうちに食べ物の色で味が決まるのかという疑問が出てきたので探究してみたい。
今後も自分が気になることを積極的に調べて深く知ることを大切にしていきたい。」

「探究するための問いを見つけるのではなくて、生活する上で見つけた小さな疑問点を探究したいと思う。日々の生活での視野を広げる。何を聞かれてもしっかり答えられるように、内容の理解を深める。」

「私の調べた内容が脳と間接的に関わっているので耳鳴りはどうしてなるのかという探究をしたいと思いました。今後頑張りたいことは今回の探究のような調べることなどを勉強に活かしていくことを頑張りたいと思っています。」

4. 今年度の実践２（SDGs 総選挙学校編）

現在の３年生に昨年度実施した SDGs 総選挙学校編を今年度版にアレンジして、11 月末から実施している。この活動では、SDGs に関する探究活動と主権者教育を融合させることで、両活動をより効果のあるもとのすることを目指し、SDGs の目標を達成するために、学校をどう変革するかを生徒に考えさせている。

（１）目標（49 回生の総合的な探究の時間のルーブリックに基づく育みたい生徒の力）

以下の表を生徒に示して、３年間で身につけたい３つの力と具体的な目標を意識させて学習をスタートさせた。今回の活動では、「自分の身の回り」に興味・関心、視野を広げることが重要であることを強調した。

高めたい力	指標項目	評価規準
課題発見能力	課題を自ら発見し、その解決のための方法を見出す力	身の回りの課題を認識し、それらの原因などを自分なりに考え、解決のための方策を、イメージしたり、考えたりすることが出来る。
	課題解決方法を作成または実行し、検証・改善する力	身の回りの課題の解決のため、自分なりに考えて取り組み、その実践を振り返り、よりよくしようと考えることができる。
協調性	コミュニケーション能力	身近な人などと関わる中で、自分の意見や思いを分かりやすく伝えたり、それに対する他者の対応を受容することができる。
	合意形成する力	身近な他者などによっての自分の存在に気付き、自分の役割やできることを考えることができる。
表現力	自分の考えを最適な形で表現できる力	ポスターや文章を作成し、身近な人に向けて自分の考えなどをわかりやすく伝えることができる。

（２）学習計画

回数	日にち	活動内容
1	11 月 22 日	ガイダンス、グループ決め
2	11 月 25 日	政策立案１　政党作りと課題設定
3	12 月 6 日	政策立案２　仮説（解決策）作り
4	12 月 9 日	政策立案３　解決策の説得力作り
5	12 月 16 日	政策立案４　政党届け、マニフェスト提出
6	１月 13 日	政策立案５　まとめ、リハーサル
7	１月 17 日	クラス内演説１　第一回投票
8	１月 20 日	クラス内演説２　第二回投票
代表政党の演説撮影の実施、選挙ポスターの作成		
9	１月 27 日	代表政党視聴　質問作成
支持・不支持、質問を見て、最終演説に向けた準備		
10、11	２月 10 日	学年演説会（質問回答、党首討論、最終演説）、投票、振り返り

工夫した点は以下の３点である。一つ目は、政策立案では、『一生使える探究のコツ』で学んだ探究方法を生かせるような授業展開にすることである。２つ目は、ペーパーレス化や ICT 活用をスタンダードにするために、政党届けや、マニフェストの提出、演説スライド作成を Google classroom を用いたところである。３つ目は、主権者教育の充実を目指して、代表政党への質問作成や学年演説会での質問回答や党首討論を取り入れたところである。

（３）現段階での取り組み状況

現段階では各政党が政党届けとマニフェストの提出が完了した。情報の授業で Google classroom を使用しているため、Google スライドを編集して提出することに大きな混乱はなかった。そのため、今後の探究活動でも ICT 機器を積極的に活用していきたい。また、初回に生徒に行ったアンケートは以下の通りである。

政治や選挙に興味や関心はありますか？	ある １５人	ややある ３４人	どちらでもない ２０人	あまりない ３５人	ない １０人
政治や選挙についての知識はありますか？	ある ３人	ややある ３０人	どちらでもない ２５人	あまりない ４８人	ない ８人
18 歳になったら選挙に行きますか？	行く ５６人	たぶん行く ３３人	わからない ２２人	たぶん行かない ３人	行かない ０人
SDGs に興味や関心はありますか？	ある ２３人	ややある ５４人	どちらでもない ２５人	あまりない ８人	ない ４人
SDGs についての知識はありますか？	ある ４人	ややある ５０人	どちらでもない ２７人	あまりない ２９人	ない ４人

今回の活動では、政治や選挙への興味や関心、選挙へ行く意欲、SDGs への興味や関心の変化に特に注目したい。そして、興味や関心、意欲が高まり、それを元に生徒が自ら学習して自分の学びを止めないような探究活動としていきたい。

5. おわりに

（1）小田原担当

本稿執筆にあたって、過去３年分の会議資料を出来る範囲で確認し、特に議論の過程の報告については客観的に記述するように努めた。しかし、筆者が確認し得た情報を筆者の視点を通して記述する以上、完全に客観的な報告には成らなかったかもしれない。ただ、過去の記録から確認できたことは、その時々で携わった担当者が探究活動を学校全体の継続的な取組とすべく議論を重ねてきたことであり、この方向性は今年度の新 KFK 会議でも常に意識されている。今年度は議論と実践を並行して行っており、３年間の計画も先述の通り、少しずつ修正をしている。また「附高ゼミ」についても、具体化して全教員が安心して関われるようにするために、まだ議論を続けている。学校全体の継続的な探究活動としては、まだまだ産声をあげたばかりで、具体的な成果を示す段階には至っていない。ただ、第１学年の国語科の教員からは、国語総合で『伊勢物語』を地理・歴史・文化など様々な角度から掘り下げて読んで、調べていく授業を行った際には、総合的な探究時間で取り組んだ、課題を見つける、情報を集める、情報を分析する、成果を発表するといった一連の活動が大いに活かされたという報告を受けている。また、私自身も、理科の科学と人間生活の授業で行っている活動は総合的な探究の時間に活かされていると感じている。この３年間の議論と実践を実らせるためにも、今後も探究活動の充実と継続のため、総合的な探究の時間と授業や学校行事が相互に好影響を与え合えるような実践を続けていきたい。

（2）青山担当

今年度の新 KFK 会議は現在までに 12 回開催された。私は、このような１つの教育活動を複数の教員と議論しながら熟考する機会が初めての経験であった。１年間の計画、３カ年計画、育てたい生徒像、目標とルーブリック、1 つずつの教育活動と議論する内容は多岐にわたり、私にとっては充実した時間であった。本校の生徒に必要なことを考えながら１つの教育活動を作り上げることは非常に難しく、時間はかかるが、修正を重ねながらより良い探究活動を目指して、今後も継続して挑戦を続けたい。

6. 参考文献

文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領解説　総合的な探究の時間編（平成 30 年 7 月）』
神原洋子（2019）　『一生使える探究のコツ　実践の手引き～導入編～』、（株）トモノカイ
稲井達也（2019）　『高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント
－導入のための実践事例 23－』、学事出版
地域・教育魅力化プラットフォーム（2019）　『地域協働による高校魅力化ガイド
－社会に開かれた学校をつくる』、岩波書店